

従来、林業は森林を中心に考えられてきました。

緑の復元や山の手入れ、間伐材対策等、森林を強くするため、様々な施策や努力が行われてきました。

日本では高度経済成長期以来、多くの住宅が建てられるようになり、木材も基本資材として必要とされてきました。とくに昭和39年の東京オリンピック開催に当たっては、木材需要が急速に増えました。

例えば、当時急ピッチで進められていた高速

緑のエッセイ



スタートラインに立てるようになりました。いよいよ、国産材の活用と再植林の時代です。国産材を価格や供給、製品の水準等で、国際的に肩を並べて競争のできるレベルにしていかなければなりません。そうして国産材の需要を伸ばしていくとともに、私たちの孫の代で使う木材を植えていく必要があります。それには、木材利用ポイント事業の実施や公共建築物等における木材の利用の促進だけではなく、民間レベルで木造化を進めていかなければなりません。よく山に木があるから使ってくれといま

道路の整備には、コンクリートの型枠合板が必要とされてきました。しかし、そこで使われていた材は、ほとんどが南洋材でした。これは海外からの輸入材が増加したために国産材が売れなくなっていたわけではありません。当時、日本の森林はまだ植林を進めている状態で、国内の需要をまかなうだけの資材を生み出すことができなかったのが原因でした。そのため、国産材は国際的なレースのなかで置いてけぼりになってしまったのです。

今日、森林資源が復活して、やっと国産材は

すが、山にある木は英語でいえば「Tree（樹木）」です。一方で、私が国産材の需要を伸ばしていくために必要だと考えているのは「Timber（材木）」です。さらにいえば、一般消費者が好むのは「Wood（木製品）」です。このように、同じ木といいながら、それぞれの立場で違うものを指しているのが問題です。せっかく川下の一般消費者が木製品を欲しているのに、川上の方々の頭には「Tree」または「Log（丸太）」だけがある状態です。両者の間に必要とされる加工が国内では立ち後れてい

ます。ですから私は、次の時代に向けて、木材利用の新しい考え方を作り出していかなければならないと考えています。

この考えを基に、私は平成12年に東京大学弥生講堂と同附属資料館、平成20年に東京大学弥生講堂アネックス、平成21年に東京大学向ヶ岡ファカルティハウスと、10年間で東京都心に3件の木造学校施設を造ってきました。これは木材や設計に対する考え方を新たにしていけば、都心に遵法でちゃんと木造施設を造ることができるといふひとつの証明です。

●プロフィール
昭和25年東京都生まれ。
東京大学農学部林産学科卒、同大学院修士課程修了。農学博士。
東京大学大学院特任教授、東京大学名誉教授。
日本木材輸出協会会長、NPO法人木未来理事長。
【最近の著書】
◎「安全で長持ちする木の家・耐久性が住宅を変える」(平成22年)
◎「新・木質構造建築読本」(平成24年)

国産材の需要拡大を図り、森林整備を進めていくためには、国内における木づかい運動の一層の推進はもちろん、いままでも国産材利用について考えるときに欠けていた国際感覚を補っていくことにより、自国の問題だけでなく、相手の国の事も考えたビジネスで輸出の拡大を図っていくことも重要です。森林から川下を考えるだけでなく、海を越えていくような逆転の発想がいま必要とされているのではないのでしょうか。